

# 猫でもわかるデカルト哲学

エレア・メビウス

## 1 知られざるデカルト

現代哲学には多くの重要問題があるが、それら問題のいくつかはデカルトから始まっている。デカルトは伊達に近世哲学の祖と称賛されているわけではない。

ところが、そのデカルトの功績は意外と知られていないし、勘違いしている人が多い。デカルトの名は哲学に興味のない人にでも知られているのに、デカルト哲学はコギト・エルゴ・スム（私は考える、ゆえに私は存在する）ぐらいしか知られていない。参考までに夏目漱石は「デカルトは、私は考える故に私は存在する、という三歳児にでも分るような真理を考え出すのに十何年か懸った」と『吾輩は猫である』で書いている。これは主人公が猫の小説なので、猫の視点から人間文化をアイロニカルに描写したとも解釈できるが、作者自身がデカルト哲学を理解できなかったのだろうと私は思う。もっとも哲学者でも理解していない人は少なくないので、このような無理解は珍しいものではない。

デカルト哲学を理解するためには、まず彼の動機を知るべきである。デカルトは『哲学原理』第一部で次のように主張している。

真理を探求するには、生涯に一度は全てのことについて、出来る限り疑うべきである。1

この主張に共感できるか否かということが哲学者と一般人の分かれ目であろう。

真理を探求する者は、そもそも真理とは何かを考えざるを得ない。そして真理とは、それを知り得るか否かにかかわらず、疑い得ない確実な知識という結論に至るだろう。

そしてデカルトは方法的懐疑によってあらゆるものを疑ったが、その疑っているということ自体は疑い得ないと確信した。ここに「私は考える、ゆえに私は存在する」という絶対確実な真理が見出される。

絶対確実な真理の価値は、真理の探求者にしかわからない。

ただし「私は存在する」はデカルト哲学の終着点なのでなく、出発点である。その「私」に関連して派生問題が必然的に生じることになる。デカルトは「私」をめぐる以下の問題を探求した。

「私」の本質とは何か？

「私」はどれだけ持続するのか？

「私」はなぜ存在するのか？

古代の格言に「汝自身を知れ」というものがある。デカルトはその問題に哲学的に解答しようとした。デカルトは「私」の哲学の創始者なのである。そしてデカルトの探求から近代・現代の哲学が始まったのである。

本論では意外に知られていないデカルト哲学の真髓を猫にでもわかるよう解説する試みである。その解説の過程でデカルトから受け継いで独自に発展させてきた個人の哲学も解説していくことになる。

デカルト哲学の価値と独創性は、大雑把に分類すると以下の五つになる。

- D 1 : 「私」という語の意味が二つあることを発見したこと。
- D 2 : D 1 より、二つの「私」の関係——人格の同一性問題を発見したこと。
- D 3 : 「私」を思惟的実体とみなしたため、心身問題の始まりとなったこと。
- D 4 : 方法的懐疑が現代的認識論の始まりとなったこと。
- D 5 : 三種類の方法で神の存在証明を行ったこと。

本論では上の五つを順次解説していくことはしない。D 1 からD 5 までは必然的に繋がる問題であるからだ。まずD 1 を解説し、そこから「私」の問題がどのように発展していったかを解説することにする。なおD 3 の心身問題についてはこれまでに多く論じてきたので省略することになる。\*

\*詳しくは拙論「心脳問題の解消」、「ゾンビでもわかる心脳問題」を参照。

## 2 「私」の意味は二つある

### 2\_\_1 「私」と「デカルト」の相違

デカルトは方法的懐疑によって「私は考える、ゆえに私は存在する」という確信を得た。重要なのはその「私」とは一個の「思考」だということだ。現代的には一個の思惟的なクオリアと言ってもよい。

なおデカルトが「考える」という思考（クオリア）を「私」と呼んだことに対し、それは論点先取であり、「考える、ゆえに考えが存在する」と主張すべきだという批判がある。これは「考える主体」の存在を否定する無主体論と呼ばれる理論であり、デイヴィッド・ヒュームの思想から始まったものである。

考える主体が存在するか否かということは形而上学の大きな問題であるが、デカルトの「私」とは問題性がズレている。デカルトが考えている時、確かその思考を「私」と呼ぶ必要はないように思える。しかし重要なのは、デカルトの思考がある時に、その思考とは別の思考がある可能性を認めるならば、デカルトの思考は必ず「私」でなければならないし、別の思考は「他者」でなければならない。

デカルトが自分の思考を「私」と呼んだことには論理的必然性があるのだ。

なおデカルトは方法的懐疑における「私は考える、ゆえに私は存在する」という結論の後に、神の存在と併せて魂の存在を主張しているが、それらは「私」の問題とは論点が異なる。無主体論は「私」ではなく、個別の意識経験を所有する主体として措定された「魂」に対する批判であるべきだろう。

ところで「私」が一個の思考作用ならば、当然デカルトが考えることをやめればその「私」は存在しなくなることが想像可能になる（この問題から後述する世界連続創造説をデカルトは考案することになる）。

要するにデカルトが発見した疑い得ない「私」とは、厳密にはデカルトという人物のことではないのだ。

しかしデカルトが「私はデカルトである」と言っても間違いではない。したがって「私」という語には二つの用法があることになる。以下のように。

私1： 私は考える

私2： 私はデカルトである

私1が主体（subject）としての用法であり、私2が対象（object）としての用法である。

実は後の時代のウィトゲンシュタインも『青色本』で、「私の歯が痛い、と私の背が伸びた、は異なる」と、「私」の用法が二つあると同様の洞察している。日本語だと前者は主語が省略できるのでわかりやすいだろう。

ここで当然、二つの「私」の関係が問題となる。そしてその問題は二つある。一つは「私は考える」と言う時の「私」が「デカルトという人物」の人生の内でもどれだけ持続しているかという問題である。これは人格の同一性問題や時間意識の哲学として今日でも研究され、論争が続いている問題である。

もう一つは「私は考える」と言う時の「私」が、なぜ「デカルトという人物」から発せられたのかという問題である。これは永井均によって独在性の問題として定式化された。ここでは独在性の哲学を詳述しないが、デカルトは独在性の問題にはあまり関心がなく、もっぱら「私」の持続という問題に拘っていた。

おそらくデカルトは、自分が睡眠中に夢を見ていない時には、デカルトという人物の内でも「私」は存在していないのではないかと疑ったに違いない。そして何十年も生きてきたデカルトという人物の中で、どれだけ「私」は持続してきたのか、そして今後どれだけ持続するのだろうか、と考えたに違いない。

そして「私」の持続という問題についてデカルトの独創的なアイデアが登場する。

## 2\_\_2 「私」の持続問題

デカルトは『省察』の第三省察で次のように論じている。

どんなものも、それが持続する各瞬間において保存されるためには、そのものがまだ存在していないときに、それを新たに創造するのとまったく同じ力とはたらきを要するからである。2

これは神による「世界連続創造説」を主張する文脈で述べられたものである。そして私が読んだデカルトの文で最も感銘を受けたものである。

しかしこの文の主旨を理解している人は稀であり、デカルトについて書かれた論文でもこの文に言及する論者は少ないのが事実である。

上の文では、物が「創造」されることと、それが時間を通じて「保存」されることが同一とされている。この主張に納得できない人が多いのは当然かもしれない。しかしデカルトは合理的な根拠によってこの主張を行っている。その根拠は後の哲学者であるジョージ・バークリーの主張を参照すればわかりやすいと思われる。

バークリーは経験主義を徹底し、物質的対象の実在も知覚経験から推定された虚構のものだとして、「存在するとは知覚されることである」という哲学原理を宣言することになる。

むろんバークリーに対しては多くの非難があった。「存在＝知覚」ということならば、誰も月を見ていない時は月が消えることになり、誰かが月を見た時にまた月は生まれることになる。これは不合理である。しかしその批判に対するバークリーの反論には素晴らしい哲学的洞察があった。

バークリーは次のように主張した。

反対論者は、私の説が事物を瞬間ごとに消滅させては創造する不合理に陥ると攻撃する。しかしこの不合理をもって私は既存の哲学原理を深く攻撃できる。私が瞼を閉じれば周囲のあらゆる事物が無に帰着することは不合理と考えられる。しかしこれは哲学者が次のような場合に共通に承認するところではないか。光と色彩は知覚される以上に少しでも長く存在しない感覚にほかならない〔…〕<sup>3</sup>

色彩も香りも音も物質自体に属するものではないので、人が知覚するのをやめれば消えてしまう。そして知覚された時のみ生まれる。確かに物事が瞬間ごとに創造され、また消えるというのは信じ難いことであるが、実は人間が経験するものは全て瞬間ごとに消えてはまた創造される不合理なものなのである。

このバークリーの洞察から、デカルトが世界連続創造説を主張した理由が理解されたと思う。或るものが時間変化を通じて次の時点に「保存」されるとは、実質「創造」と同じことなのである。

デカルトとバークリーの洞察は、一般人が当たり前のように受け入れている経験的知識、時間変化というものにある不合理を看破したという点で、特筆されるべきものである。参考までに哲学の歴史において時間変化の不合理を最初に看破したのは古代エレア派の哲学者たちであった。エレア派は時間変化というものが無からの生成を含むものであること看破し、変化の実在を否定して現象世界を錯覚とし、不変の実体を想定した。

ただし、現代的に見れば彼らはマクタガートのB理論を知らなかったという難点がある。アインシュタインの特殊相対性理論から永久主義という時間の形而上学が導出された。永久主義によれば歴史上の各時点の出来事は生成も消滅もせず、永久的な四次元のブロック宇宙に存在する。そしてマクタガートのB理論は「現在」と

いう時制に特権を認めず、歴史上の各時点の出来事を「出来事Bは出来事Aの後であり、出来事Cの前である」と関係語によって時間を表現する。このB理論は相対性理論と親和的であり、現在のみが実在するという素朴な現在主義的時間理解を否定しながらも、ブロック宇宙内の各時点を記述することができる。現代の多くの物理学者は「相対性理論で記述される時間は実在するが、変化や時間の流れは実在しない」と主張している<sup>4</sup>。

B理論は時間の哲学におけるコペルニクス的転回であった。そして現代の物理学は、エレア派の主張から始まった時間変化が含む不合理を「時間」と「変化」を分離して解消してしまったと解釈できる。それは変化は実在しないというエレア派の主張を部分的に認めるものであった。

しかし時間の実在は認めるが、変化の実在を認めないという永久主義を前提すると、デカルトが腐心した「私」の持続問題は消去せざるを得ない。ブロック宇宙内の各時点は永久に存在するので、各時点にある意識現象も永久にあるということになる。すると「私は考える、ゆえに私は存在する」と言った日のデカルトと、その前日のデカルトは対等に存在するので、片方から見ればもう片方は「他人」に等しいことになる。\*

\*この問題は拙論「〈私〉の持続という問題」で詳述した。

デカルトは思惟的実体の「私」と、デカルトという人物としての「私」の関係に拘り、その思惟的実体がデカルトの人生全域にわたって存在していることを証明しようとしたのだが、現代の物理学と哲学はそれを否定したということになる。

もちろん現代哲学と言っても様々な主張があるので、現代でも変化の実在を認めて、意識が数的同一性を保ちながら持続していくという主張は少数だが存在する。永久主義とB理論では「私」は一瞬であり、次の瞬間には異なる存在者になる。それがとても信じられないわけである（私も信じられない）。しかし論理的整合性と物理学との親和性から考えると永久主義は疑う余地がないほど妥当な理論であることは認めざるを得ない。

猫のような動物は自己の同一性という問題を考えない。その時々を知覚や記憶で行動しているだけだろうし、それで動物の意識や行動は説明できてしまう。すると人格の同一性問題を消去したヒュームが正しく思えてくる。結局この問題は社会的に構成されたもので、人間理性の捏造物かもしれないのだ。

### 3 知識の確実性について

現代的な認識論はデカルトから始まった。認識論は存在論と並ぶ現代哲学（とりわけ分析哲学）の分野である。

デカルト認識論の特徴は「私は考える、ゆえに私はある」という絶対疑い得ない真理を基礎にして、神の存在証明にまで至る壮大な知の体系を構築しようとしたことにある。

ところがそのようなデカルトの方法は現代ではあまり評価されておらず、批判的な意味で「基礎付け主義」と呼ばれている。オットー・ノイラートは、人間知識の体系というのは航行中の船のようなものであり、故障（誤謬）があればそれを修理しつつ航行していかなければならず、人間は航行中に船を一から作り直すことはできない船乗りのようなものである、と主張した。これは「ノイラートの船」と呼ばれ基礎付け主義に対するアンチテーゼとしてよく用いられる。

ノイラートの主張には一理あることを私は認めるが、しかし彼がデカルト哲学を十全に理解しているとは思えない。

デカルトは『哲学原理』第一部で、懐疑の方法について次のように述べている。

- 1 : 真理を探求するには、生涯に一度は全てのことについて、出来る限り疑うべきである
- 2 : 明白に真だと思われるものを見出すために、疑わしいものは虚偽だと考えるのが有用である
- 3 : （しかしこの疑いは実生活には及ぶべきではない）
- 4 : 感覚は時に錯誤するものであり、疑わしいものである。懐疑主義者には夢と現実を確実に区別することはできない。
- 5 : 数学的証明についても疑うことができる

デカルトは全ての知識について疑ったが、各知識の「疑わしさ」は全て同等なのではない。上では感覚が疑わしいものの代表として挙げられている。実際人は感覚によって錯覚や誤判断することがよくあり、夢の経験と現実の経験を混同することも稀にあるので、感覚は疑わしいものである。

しかし数学的証明については疑わしさが大幅に減少する。だからこそデカルトは「疑うことができる」とあえて書いているのだ。2 + 3 = 5 という数式が誤謬であると思う人は幼児を除外すればいないだろう。人は時に計算ミスをするが、単純な加減乗除については、慎重に計算すれば間違えることはなく、計算結果について衆人の合意も得られるだろう。それでも2 + 3 = 5 は欺く神によって正しいと信じ込まされているだけだと疑えなくもない。しかしそれはかなり無理な懐疑である。

数学的証明はデカルトでも疑うのは難しかったのだ。

ならば幾何学的証明も同様である。

では自然科学の知見はどうだろう。自然科学は後にヒュームが指摘したように帰納法と自然の斉一性という原理に基づいている。これを単純化して言うと、経験によって知った自然の法則性は、明日も昨日と同様に存在するだろうということである。これは数学的証明に比べると疑わしい。

しかし錯誤しやすい感覚に比べるとどうだろう。自然の法則性は古今東西の衆人が経験してきたことなので、感覚に比べると信頼性は高いはずである。

私が主張したいのは、要するに人間知識の確実性にはランク付けができるということなのだ。

デカルトは単に何でも疑ったのではない。自らの知識を懐疑する過程で、絶対確実なもの、確実性が高いもの、疑うのが容易なもの、かなり疑わしいもの、と知識の確実性には差異があることを悟っていたのだ。

デカルト哲学から学ぶべきなのは、人間知識には確実性のランク付けができるということなのだ。

以下に四つの判断並べた。

**判断 1 :** 私は考える、ゆえに私は存在する

**判断 2 :** 「Aであり、かつAでないもの」はない

**判断 3 :** 磁石が鉄を引き付けるのは電磁気力があるからだ

**判断 4 :** 釘を踏んだ私の足が痛い

判断 1 はデカルトが方法的懐疑によって見出した「私」。判断 2 は無矛盾律。判断 3 は物理法則。判断 4 は知覚判断である。

いずれの判断も確実なように思えるが、実は確実性の高さには差がある。判断 1 が一番確実性が高く、判断 2 が二番目、判断 3 が三番目、判断 4 が四番目である。

判断 3 は物理法則だからヒュームが指摘したように帰納法に対する懐疑ができるということである。手に持った石を放せば地に落ちる。それを千回やっても同じ結果が出るだろう。しかし無限回やることはできない。有限回の経験から見出した法則を無限回に当てはめることはできない。これは規則のパラドックスという問題でもある。帰納法に基づいて発見された物理法則は、ほんの少しだけ疑えるということである。

なお判断 1 のデカルトの「私」は判断 2 と同じものだという人がいる。つまり「私は考える、かつ考えない」というのは矛盾だからデカルトの結論は真理だという解釈である。しかしそれは間違っていないが平凡な解釈である。デカルトが方法的懐疑によってあらゆるものを疑っている時、論理法則も疑いの対象であることを忘れてはいけない。しかし仮に論理法則までも欺く神によって確実だと信じ込まされているだけだとしても、それでもなお「私は考える、ゆえに私は存在する」は真理である。デカルトが偉いのは語の定義や論理法則といったプロセスを経ずにダイレクトにアクセスできる真理を発見したことなのである。

知覚（クオリア）に基づく判断 4 が一番確実性が低いというのがわからないという人がいるかもしれない。確かに人は錯覚をすることがあるが、痛みがあったら、それは「痛い」と言う他はない。たとえそれが錯覚だとしても「錯覚自体は存在する」と主張できる。これは錯覚論法と呼ばれる。

しかし錯覚論法の主張をいったん認めても、それでも判断 4 が一番確実性が低いと考えざるを得ない。その理由はクオリアというものが検証不可能だからだ。痛みは現れてから「これは痛みだ」と確認して判断するのではない。痛みは「痛い」という判断と共に現れる。赤さは「赤い」という判断と共に現れる。だから知覚判断



は疑いたくても疑えないのだが、しかしその判断は客観的に検証できない。それが判断2や判断3との重要な差異である。

先述の通り感覚はしばしば錯誤するので疑わしいものであるとデカルトは主張した。しかし私はデカルトとは別の意味で感覚（クオリア）は疑わしいと主張している。

錯覚論法が主張するように、知覚で何かを錯覚した場合でも、錯覚そのものは実在すると主張することができるが、私はその錯覚（クオリア）の存在も懐疑できると考える。クオリアというものは実は存在しないという類の主張ではなく、人はクオリアの正体を正確に認識していない可能性があるという主張である。

たとえば「赤」は多くの述語で説明できるが、それら述語はいずれも「赤」そのものについて語っていない。赤を中心に多くの述語を集め添えても、赤そのものはブラックホールのように論理と意味の世界に開いた空虚な穴のように見える。人は認識対象を「A is B」というような主語→述語の関係で理解するが、クオリアとは言葉ではないので、そのような形式で理解することができない。クオリアは論理や意味の枠組みの外部にある。つまり人が赤のクオリアを経験して「赤」と言った場合、それは「赤」という言葉の意味と機能を表しているだけで、赤のクオリアそのものは語れない。これがクオリアというものは正体不明であるという私の主張の核心である。

デカルトは「私」の存在は確実だと考え、そして「私」とは思惟的実体だと考えた。思惟もクオリアの一種である。しかしクオリアの正体が不明ならば、「私」の正体も不明なのではないかと、私は懐疑しているのだ。

デカルトから始まった「私」の哲学はこのように底が深く、見極めた者はいない。

## 4 神の存在証明と、「私」の存在の必然性

### 4\_1 デカルトの証明方法

デカルトは以下の三種類の方法で神の存在証明を行っている。

**証明1：** 本体論的証明

**証明2：** 世界連続創造説

**証明3：** 究極原因の必要性

証明2の世界連続創造説については前述した。時間を通じて物が存在するためには、そのものが新たに創造されるに等しい力を要するというのがデカルトの鋭い洞察であった。しかしこの証明は時間の形而上学の永久主義とB理論が主流となった現代では時代遅れと判断せざるを得ない。

証明3の物事の究極原因というのは、原因の原因、そのまた原因という無限後退を避けるため措定されるものである。無限後退が何も説明しないことは古代ギリシャの時代から知られており、アリストテレスも万物の運動の根本原因として、他に

よって動かされることがなく、他を動かす「不動の動者」として神の存在を措定した。

デカルトは方法的懐疑によって「私は存在する」と結論した。しかし「私」を存在させた原因が存在するはずだ。デカルトという人物は父母から産まれた。その父母もまたその父母から産まれたはずだ。そのように延々とその原因を辿って行くことができるだろう。しかし無限後退は何も説明しない。したがって究極原因として神が存在するはずだとデカルトは考えた。神が「私」を創造したのである。

デカルトの「私」の哲学の特徴は、神の存在によって「私」の存在に必然性を与えたことである。

なお類似の発想はデカルトに先立って神の存在証明を行ったアンセルムスにもあったようである。アンセルムスは『プロスロギオン』第一章で「神よ、私をあなたのイメージから創造してくれことに感謝します」と書いている。

私はアンセルムスやデカルトが神の存在によって自分の存在の必然性を証明しようとした試みには感心するのだが、しかし神が存在すると仮定しても、歴史上の偉人であるアンセルムスやデカルトはともかく、この私を創造しなければならない必然性がわからない。「私」の哲学は神を措定しても謎が多いと考えざるを得ない。

なお証明1の本体論的証明とは、「神には最も偉大な存在という概念が属し、最も偉大な存在というものは概念だけでなく現実に存在する」という論法である。これは現実に存在するものは概念だけの存在より優れているという前提がある。この論法はアンセルムスが主張し、デカルトも類似の論法を用いている。

しかしこの論法は一見して詭弁だと思えるし、アンセルムスと同時代のガウニロや、後の時代のカントも「存在する」という概念から「現実に存在する」ということは導出できないと批判している。カントによれば可能的な対象も現実的な対象も概念の内容は同じである。たとえば想像上の百億ドルと現実にある百億ドルは概念としては同じである。「存在する」という語は単に概念を表す述語ではないのである。

しかし、私から見るとガウニロやカントの批判は間違っていないが、必ずしも当を得ていないと思える。アンセルムスやデカルトは予弁法を用いていないが、ガウニロやカントのような批判があることは承知の上で本体論的な神の存在証明を行ったように思うのだ。

このことを説明するためには、時代をかなり遡ってエレア派の哲学を再検証する必要があるだろう。

## 4\_\_2 世界があることの必然性

人は「水がある」や「家がある」と言うが、そもそも「ある」とは何だろう。述語として「～がある」というのでなく、「ある」そのものとは何か。この問題意識がパルメニデスから始まるエレア派哲学の出発点であった。そして「ある」を考えることは「ない」を考えることでもある。

そしてエレア派は「無」の存在を否定した。無は思考不可能であり、指示対象を持つことができない。「無がある」と言うのは矛盾である。「そこには何もない」と言った場合でも特定の空間があることを前提している。人は暗黒の空間を思い浮かべて、それを全く何も無い状態と勘違いすることがあるが、それは黒塗りの空間という存在である。

参考までに物理学者のイーサン・シーガルは無を以下の四つに分けている 5。

- 無 1 : 物質が存在しない
- 無 2 : 時空の内に何もない
- 無 3 : 最低エネルギー状態
- 無 4 : 何のエネルギーも物理法則もない

無 4 は絶対無 (absolute nothingness) とも呼ばれ\*、物理学的に意味を持っていない哲学的なものとしてシーガルは語っている。

\* 西田幾多郎の哲学にも「絶対無」という用語があるが、全く異なる意味である。

物理学者には時折「無から宇宙が生まれた」と主張する人がいるが、その場合の「無」とは絶対無のことではないということが重要である。

なおベルクソンは、「無」とは或るものの存在を否定する語であって、それ自体が存在するものではないと主張している。これはエレア派と類型の思想である。私はベルクソンに同意する。

人は「何もない世界」と言葉で語ることはできるが、仮にこの世界に何も無ければ、それは「世界」ですらない。

無の存在は形而上学的に不可能である可能性が高い。

存在と無には差異がある。それは哺乳類と爬虫類は異なる、卵と太陽は異なる、などとは全く異質の差異である。むしろ差異というものの極限であり、存在と無には真の意味で無限大の懸隔がある。両者が溶け合うことはあり得ない。これは有が無になることはあり得ないということであり、変化の存在を否定するということである。エレア派の哲学は時間の形而上学における永久主義の起源となった。

エレア派は「ある」そのものと「ない」そのものを考究し、無の存在を否定して有のみを認めた。無の存在を否定した場合、或る存在者と別の存在者を隔てるものがなくなるので、エレア派は世界を「有」で満ちた一個の完全な凝結体であり、たとえば「丸い球」のようなものであると考えた。

ゼノンには四つのパラドックスで変化の存在を否定し、世界が「一」なるものであることを証明しようとした。ゼノンのパラドックスは無数の存在が矛盾であることを示すものである。空間と時間変化が存在するならばそれらは無限分割可能となる。矛盾したものは存在しないので、空間と時間変化は存在しない。

後にカントによって提起されたアンチノミーの問題は、このゼノンのパラドックスを発展させたものである。カントは時間と空間を物自体（実在）に属さない感性の形式と考えた。

ゼノンの無限分割は「無」の実在を否定する論証になると私は考える。無とは幅も直径もゼロである（無に幅があると言うなら既に無ではない）。したがって無が実在するというなら 1ミリの幅にも 1秒の時間にも 1個の水素原子内にも無限個実在していることになる。この場合、有の内には無はないと考えてはいけない。無とはエネルギーも大きさもなく他のものに作用しないのだから、無を存在者と同様に扱おうと有の内にも無は無限にあることになる。無限の実在とは矛盾である。したがって無は実在しない。\*

\*「無限の実在」という概念自体が矛盾であることは、拙論「亀でも数学者でもわかる哲学の無限論」で詳述した。

哲学には「なぜ何もないのでなく、何かがあるのか」という究極の問題がある。確かに世界に何もないことは可能であったように思われるのに、なぜだか世界には何かが存在している。この問題については「無」自体がなく「有」は必然的だとしたパルメニデスの解答が最も魅力的であり、おそおらく真理であろうと私は考える。

なおこれは単なる概念分析に留まらず、「無」と「有」という概念を現実に演繹したものであり、様相の形而上学的一种である。

「無」とは或るものの存在を否定する否定形の用語であり、その実質は「有」の一種である。「無」それ自体が存在するのではない。すると「有」は現実存在することが必然となる。「有」と「無」の概念は現実と必然的に一致する。これがエレア派の哲学のエッセンスである。

実はアンセルムスやデカルトの神の存在証明は、エレア派と類似の手法なのである。ガウニロやカントの批判が不十分なのは、彼らの批判は概念分析に留まり、様相の形而上学としてはアンセルムスやデカルトに比肩していないのである。

たとえばユニコーンは想像上の存在であり、想像上存在するから現実に存在するとは言えない。しかし神の概念は「現実に存在する」ことを含められているためユニコーンとは異なる。

神の存在証明のエッセンスを再確認しよう。

最も偉大な存在は、概念だけでなく現実に存在する。

現実に存在するものは概念だけの存在より優れているという前提があるので、神が現実に存在しないなら、現実に存在するどこかの国王やローマ法王が神より偉大な存在となる。国王は概念としても存在するので、「最も偉大な存在」という神の概念と思考内部で矛盾する。したがって神が現実に存在することは必然とされる。

ここにはエレア派の「無」はなく「有」は必然的にあるという、概念を現実に演繹する論法との類似性がある。つまり「最も偉大な存在」は「有」の存在の必然性と類似しているように思えるのだ。

もちろんエレア派の理論に比べると神の存在証明には曖昧さがある。「偉大」とは曖昧な概念であり、「現実に存在するものは概念のみの存在より優れている」という前提にも疑問がある。

この神の存在証明が厄介なのは、様相の形而上学そのものが、論理学や概念分析では真偽を判定できないということにある。

少なくとも、神の存在証明は単なる概念分析によって詭弁であると直ちに棄却できない価値があると私は思う。「偉大」や「優れている」という曖昧な概念、そして「現実に存在するものは概念のみの存在より優れている」という前提を用いた証明方法は成功していないのだが、失敗しているとも判定できない。

そして成功している可能性を認めるだけで、とりあえず十分である。

私は「無」の实在を否定することによって「有」が实在することは必然的だとするエレア派の主張は成功しているように思う。しかし神の存在証明は失敗とは言わないが、欠陥があるとみなす。「神」の概念、とりわけ西欧神学で論じられるアブラハムの神とは擬人化された存在であり、仮に概念上の「最も偉大な存在」が実在するとしても、それは神である必要がなく、物理学的な「究極の理論」、あるいは形而上学的な「万物の根本原理」であっても構わないと思えるからだ。しかし、それらを或る種の「神」と呼ぶことはできるかもしれない。

参考までに八木沢敬は『神から可能世界へ 分析哲学入門・上級編』で、「神という言葉避け、それより偉大なものを考えることが出来ないようなXは存在すると解釈すれば、分析哲学的には十分である」とアンセルムスによる神の存在証明を哲学的考察に値するものとみなしている<sup>6</sup>。

以上のような理由で私はアンセルムスの証明法を次のように改訂したい。

世界をこのように存在させた根本原理は現実に存在する。

この主張に反対する人は物理学者でも少ないと思われる。「最も偉大な存在」と「根本原理」は対象の見方を変えただけのものだと解釈できるだろう。したがって神の存在証明は単に詭弁とみなして退けられない価値があると私には思える。ただし擬人化された神は退けることになる。

なお根本原理とは単に世界を存在させている原理のことでなく、世界を「このように」存在させている原理のことである。「なぜ何もないのでなく、何かがあるのか」という問題については「無」の实在を否定したエレア派の理論によって解答可能だろう。しかし世界がこのような在り方で存在する必然性については謎である。

たとえば私が存在しない世界は思考可能であるのに、なぜだか私は存在している。アンセルムスやデカルトは自分の存在理由を神に求めた。しかし私は神を信じないので、私を存在させた原理というものを考えざるを得ない。

この問題は宇宙論における「ファインチューニング」という問題とかかわることになる。

ファインチューニング（微調整）とは、この宇宙は知的生命の存在の為に必要な物理定数を持っているが、宇宙誕生後このような物理定数が形成される確率は天文学的に低く、僅かでも物理定数が異なっていたら知的生命は存在出来なかった、という説である。

ファインチューニングが提唱されたのは1970年代で、当時の物理学者たちは神学的な主張だと解釈して忌避していたが、21世紀に入って真面目に論じられるようになり、2017年にはギリシャのクレタ島で国際的な会議が開かれている<sup>7</sup>。

ファインチューニングについて、神学者は神がこの世界を創造したからだと言う。目的論的世界観に適合するので、ファインチューニングとは現代版の神の存在証明となっている。

物理学者ではマルチバース（多元宇宙論）によって説明する人が多いように思う。哲学者にもデイヴィッド・ルイスのように類似の説明（様相実在論）をする論者がいる。

しかしごく稀に「偶然」または「生の事実 (brute fact)」と主張する人もいる。

私はファインチューニングが偶然であるとはとても思えない。ファインチューニングが成立する確率には諸説あるが、10の55乗分の1や、10の10乗の123乗といった気の遠くなるような低い確率が主張されている<sup>8</sup>。

ファインチューニングを説明できる何か「未知の原理」が必要であり、あるに違いないと私は思う。

様相の形而上学では、全てのものは必然的に存在するとする必然主義と、それを否定する偶然主義の対立がある。必然主義はルイスが代表で反直観的なため批判されるが、人間理性はカントがいくら批判しようとして理由を求めるものであり、偶然というものが許せないのだ。

ファインチューニングを擬人的な神に依存せず説明できる物理学の有力な理論は、今のところマルチバースだけのように思える。宇宙の数が無限に近いほどあれば、知的生命の存在するこの宇宙はその一つということで説明できるのだ。知的生命の存在しない宇宙には観測者がいない。しかし観測者がいるこの宇宙では「なぜファインチューニングが成立しているのか」と疑問に思う者がいるのは必然的だということである。

マルチバースは一見過剰な形而上学であり、これで問題を解消しようとするのはナイーブな発想にも思えるが、天文学的に低い確率の実現を、単に偶然とみなして問題を消去しようとする方法はもっとナイーブだと私は思う。

したがってマルチバースはこの世界の存在の必然性を証明する様相の形而上学として優れた理論であると私は考える。

しかし、それでもマルチバースは節約の原理に著しく反しているように思われるので、もっとシンプルにファインチューニングを説明したいと思う人は多いはずで

ある。神、あるいは神と呼ぶことが可能な未知の原理があるという説には一定の理がある。

心脳問題では認知的閉鎖という概念がある。人類の脳はアフリカ大陸で生き延びるため進化したものであり、心脳問題を解決するためのものではないということである。しかしそれならば相対性理論や量子力学を解明するためのものでもないはずだ。人間の脳は不自然なほどオーバースペックであり、それ自体が解明されるべき謎であるような気がする。

参考までに映画『2001年宇宙の旅』では、猿人が道具として使った骨を放り投げ、その骨が宇宙船となって降下するという数百万年分の進化を一挙に表した名シーンがある。監督のキューブリックも進化に神秘を感じたからこそ、映画にモノリスという神のメタファーを登場させたのだと思う。

モノリスは神を抽象的に表現したものだが、もし人間や世界をこのような在り方で存在させる原理があるとしたら、それはモノリスのような物質的なものではなく、擬人化された神のような精神的なものでもなく、数学的に表現できる物理法則に似た、メタ様相論理というものであるかもしれない。

世界には現在の科学でも哲学でも説明できない「何か」がある可能性を、私は認める。アンセルムスやデカルトが行った神の存在証明は、メタ様相論理の一種と言ふべきものであり、彼らの哲学的探求は単に欠点があるからといって棄却できない価値があると私が考える理由である。

### 4\_\_3 「有」とファインチューニングの同一性

実は心脳問題の観点からファインチューニングの必然性を説明する方法がある。それは前述したエレア派の「有」の必然性とファインチューニングを同一とみなすのである。

「有」が必然的だとしても、その「有」の実質とは何かと考えるということは、究極の実在とは何かと考えることでもある。

哲学では伝統的に、物的なものだけが実在だとする唯物論、心的なものだけが実在だとする観念論、心的なものとの物的なものとの双方が実在だとする二元論の三つがある。

仮に観念論が正しければ、実在的なのは心的なものだから「有」の実質は心的なものであり、ファインチューニングは必然的になる。

ファインチューニングの観点からすると、観念論は有力な理論である。

ただし私はバークリーの意味で「意識外部は実在しない」という観念論を主張するつもりはない。現代の科学的実在論の論争では、物質的対象の実在を否定して、実在的なのは物理学で記述される世界の数学的構造だけだという主張がある。これは構造実在論と呼ばれる。構造実在論はアンリ・ポアンカレに起源がある。ポアンカレはカントによる現象（心的なもの）と物自体の区別を継承しており、科学とは人が経験する現象たちの関係を記述するのみであり、実在は不可知であると考えた。

つまり構造実在論によれば、世界に実在するのは心的なものと、物理学で記述される諸現象の数学的構造だけだとなる。その数学的構造とは現象という心的なものたちの関係のことである。

すると惑星や原子など物的なものがあり、それゆえに心的なものがあるという常識的な見方を逆転させ、物的なものたち（の数学的構造）は心的なものから見出されたものだという見方もできることになる。これは観念論の一種と見られるかもしれないが、構造実在論は科学的実在論を擁護するために提唱されたものであり、物理主義の一種なのである。しかし見方を逆にすれば観念論の一種とみなせることも確かだろう。

「世界にはなぜ何もないのではなく、何かがあるのか」という問いに含まれる「ある」の実質は心的なものだから、世界に心的なものが存在することは必然と言える。そして構造実在論を前提すれば、心的なものたちの数学的構造が実在するものも必然であり、知的生命体の存在は進化論的に説明できるので、知的生命体の存在も必然的と言えるのである。\*

\*構造実在論と心脳問題の関係については拙論「ゾンビでもわかる心脳問題」で概説した。

以上がファインチューニングの必然性の説明となる。「心」は実在的であり、物理学で記述される数学的構造とは、「心の構造」として必然的に存在していなければならないからだ。この場合、物理的構造を原因として心が存在すると物理主義的に考えても良いし、心が存在することを出発としてその原因として世界の数学的構造が存在すると観念論的に考えてもよい。双方の観点はアヒルーウサギの反転図形のように同一の対象の見方を変えただけなのである。いずれにせよ心的なものが実在ならば、その心的なものの構造として世界の数学的構造、ファインチューニングが存在することには必然性があるのだ。

これが心脳問題の観点からファインチューニングの必然性を証明する方法である。エレア派の「有」とは心的なものだから、その心的なものの法則を記述する数学的構造があるのは必然ということである。

このような観念論的な見方を忌避する人はいるだろうが、そのような人は物理学的なマルチバースか神学的な神を措定してファインチューニングを説明しなければならないだろう。いずれも私のアイデアに比べると法外な形而上学だと思える。

## 5 「私」の哲学の未解決問題

デカルトは「私」の哲学の創始者であった。その論点は「私」とは何であるか、「私」はどれだけ持続するのか、「私」はなぜ存在するのか、という三つに分けられる。

デカルトは「私」の正体が思惟的なものであるとみなした。そして「私」の存在の必然性と、「私」の持続という問題を解決するため魂と神の存在証明を試みた。



デカルトの証明が全て成功しているとは思わないが、私はデカルトやエレア派の示唆を受けて、様相の形而上学の観点から世界が存在することの必然性とファインチューニングの必然性を結びつけた。私は自分の論証が厳密さに欠けていると自覚しているが、それなりの尤度はあると思う。

ただし「有」の必然性とファインチューニングの必然性は繋がるが、「私」の存在の必然性とは乖離がある。世界に私が存在しないことは思考可能なのに、なぜだか私は存在している。ここにはファインチューニングのような天文学的に低い確率という問題がない。というより、確率で考えることが的外れだと思える。

人格的な神の存在を仮定しても、神がこの私を創造することの必然性がわからない。

私が存在することの必然性を主張できる唯一の理論は独我論である。世界の物事は全て私の心への現れであり、心の外部には何もないと仮定するなら、私の存在は「有」の必然性と結びつく。

しかし私は物理学を信頼し、構造实在論を妥当と認めているので、そのような極端な理論は採用しにくい。構造实在論を前提するなら、世界に多数ある脳を記述する数学的構造には、それぞれクオリアが相関しているはずだからだ。

実は独我論を採用せずに私の意識と他者の意識が存在する必然性を説明できるアクロバットな存在論がある。プラトンのイデア論である。意識の特徴として必ず主観性が挙げられるが、イデア界のような所にクオリアがあり、多数の人が「赤」を経験する場合、一つの赤のイデアを多数の人が経験すると考えるわけである。そう考えれば独我論を採用せずに「有」と私の存在の必然性が結びつく。数学の实在論でもそうだが、イデア論は完全に死んではいない。

しかし私はイデア論を採用するつもりはない。構造实在論と比較して非科学的な形而上学だと思われるからだ。すると私はなぜ存在するのか、やはりわからない。

もう一つの謎は「私の持続」という問題である。デカルトは「私」が刹那的な存在だとみなして、「私」を持続させるのは神による世界の連続創造だと想定した。

しかしデカルトは永久主義やB理論という時間の形而上学のコペルニクスの転回を知らなかった。永久主義とB理論は疑うことが極めて困難である。すると「私」という存在者は瞬間的となり、人格の同一性問題におけるヒュームの還元主義とほぼ一致してしまう。たとえば交差点で「青」「黄」「赤」と信号変化を経験した場合、青と赤には共通する要素がないので、「青を見る私」と「赤を見る私」は数的に異なる存在者となり、極端に言うと互いに赤の他人となる。

この結論に私は納得できない。永久主義とB理論は反駁不可能なほど完成度が高いが、それでも私は自分が一瞬の存在者だということが信じられない。

しかし私が仮に一瞬の存在者だとしても、それはファインチューニングの問題と異なり「偶然」と言っても無理がない。

B理論の説明力の高さからすると、私という存在者が一瞬である可能性は高いことは認めざるを得ない。

この問題は生と死の問題にも繋がる。永久主義を前提すると、「今この私」は一瞬の存在であるが、永久の存在である。「私という人物」は未来において死ぬが、「死ぬ私」は「今この私」とは異なる存在であり、端的に言うと他人である。

私は永久主義とB理論を妥当と認めていても、両理論に納得しきれないので、死の問題には困惑せざるを得ない。

どうしても「今この私」が永遠の一瞬であることが信じられないのだ。

しかし永遠の一瞬という帰結を回避する理論はないわけではない。

デカルトが判断したように「私」とは思惟的な存在、つまりクオリアなのであるが、そのクオリアの正体というものがわからない。「赤のクオリアとは何か」という素朴な問いがある。赤は多くの述語で説明できるが、それら述語はいずれも赤そのものについて語っていない。クオリアは論理や意味の枠組みの外部にある。

既述したように、世界に実在するものは現象（クオリア）と、その現象間の関係を記述する世界の数学的構造である。

しかしクオリアとはただ人に感じられるだけで、「感じられること」以上のことを人は知り得ない。その正体は不明である。

正体不明という前提を置くと、永久主義が正しく変化が実在しないとしても、クオリア自体は変化しないが、変化はクオリア内の性質として存在すると考えることもできるし、その可能性はあると思える。それは人にはイメージできないものであるが。

先に交差点で「青」「黄」「赤」と信号変化を経験した場合、B理論では「青」と「赤」が別の存在者となることを説明した。しかしクオリアの正体が不明であるならば、「青」「黄」「赤」は一つの存在者の三つの性質であると考えることが可能に思えるのだ。一般に「青と赤は異なる」と言う場合、それは概念としての相違を示しているのみで、論理的に異なることは示されていない。

四次元主義（永久主義）はワーム説と段階説に分けられる。段階説は時空内の各段階を独立した存在者とみなす。つまり「青」「黄」「赤」は異なる存在者とみなす。対してワーム説は各段階を一つの時空ワーム内の諸性質とみなす。

B理論は段階説を含意しており、これはヒュームの還元主義とも相性が良く、信号変化などのクオリア経験と一致しているように思えるが、クオリアの正体が不明だとするならワーム説の可能性も捨てられない。

すると私の人生の全経験は一つの存在者の諸性質であることも可能になる。

そのような前提を置くと死後の輪廻なども思考可能になる。これは過剰な形而上学であると思うが、クオリアの正体が不明だということはそのような可能性も派生させるのだ。

もちろん、永久主義＋B理論の説明力が最も優れていることは事実である。しかし他の理論の可能性が全くないわけではないということだ。

私は「今この私」という存在が永遠の一瞬であることがとても信じられないが、ひょっとしたら存在のわからなさこそが、最後の希望なのかもしれない。

## 脚注

- 1 デカルト『哲学原理』 p. 35
- 2 デカルト『省察』 p. 78
- 3 バークリー『人知原理論』 p. 76
- 4 Youtube で視聴できる「Closer To Truth」では、ロバート・ローレンス・キーンが「時間」というテーマで多くの物理学者にインタビューしているが、大半の物理学者はブロック宇宙の存在を認める発言をしている。
- 5 <https://bigthink.com/starts-with-a-bang/4-meanings-nothing/>
- 6 八木沢『神から可能世界へ 分析哲学入門・上級編』 p. 50
- 7 [https://www.youtube.com/watch?v=temK\\_rx-NKg](https://www.youtube.com/watch?v=temK_rx-NKg)
- 8 <https://plato.stanford.edu/entries/fine-tuning/>

## 参考文献/参考WEBサイト

- 八木沢敬 著『神から可能世界へ 分析哲学入門・上級編』講談社選書メチエ 2014
- バークリー, ジョージ著 大槻春彦 訳『人知原理論』岩波書店 1958
- デカルト, ルネ著 谷川多佳子 訳『方法序説』岩波文庫 1997
- デカルト, ルネ著 桂寿一 訳『哲学原理』岩波文庫 1964
- デカルト, ルネ著 山田弘明 訳『省察』ちくま学芸文庫 2006
- <https://bigthink.com/starts-with-a-bang/4-meanings-nothing/>
- [https://www.youtube.com/watch?v=temK\\_rx-NKg](https://www.youtube.com/watch?v=temK_rx-NKg)
- <https://plato.stanford.edu/entries/fine-tuning/>

Copyright

猫でもわかるデカルト哲学

著者 : エレア・メビウス

発行日 : 2023年4月5日